

第2回図書館ゼミ開催



英語の「学び方」と「使い方」

武田智光 教頭先生

▲講演では英語を使ったレクリエーションなども行われた。

先生からすると前者の方が楽だと思うが、生徒からは後者の方が良いという意見もある」と明かされた。そしてCLTについて「ある論文でCLTについての4つの問題点が指摘されている。それは文法の軽視、会話能力の過度な重視、会話の内容が制限されてしまい会話の自由度が低いこと、先生の負担の大きさの4つだ」と述べられた。

また武田先生はどうすれば

11月21日に本校図書館で図書館ゼミが開催され、武田智光教頭先生が「英語教育の試行錯誤と今後の展望」〜一体どうなれば英語が使えるようになったといえるのか〜と題して講演された。

武田先生は英語の授業形式

について「The Grammar Translation Method (訳読式)は

日本で古くから行われてきた英語の教授法だ。これは教師が日本語で生徒に話したり、質問したりする形式の授業のことだ。一方、最近注目されている方法はCommunicative Language Teaching (CLT)と

いうもので、これは英語でコミュニケーションを行う能力の獲得を重視した方法だ。授業では先生と生徒が双方向に英語を使って話することになる。

先生からすると前者の方が楽だと思うが、生徒からは後者の方が良いという意見もある」と明かされた。そしてCLTについて「ある論文でCLTについての4つの問題点が指摘されている。それは文法の軽視、会話能力の過度な重視、会話の内容が制限されてしまい会話の自由度が低いこと、先生の負担の大きさの4つだ」と述べられた。

また武田先生はどうすれば

武田先生は英語の授業形式

について「The Grammar Translation Method (訳読式)は

日本で古くから行われてきた英語の教授法だ。これは教師が日本語で生徒に話したり、質問したりする形式の授業のことだ。一方、最近注目されている方法はCommunicative Language Teaching (CLT)と

いうもので、これは英語でコミュニケーションを行う能力の獲得を重視した方法だ。授業では先生と生徒が双方向に英語を使って話することになる。

英語が使えるようになったといえるかという基準について「英語の能力には文法的に正しい文を用いる文法的能力、意味のある話や文脈を理解し言葉にする談話能力、常識に照らし合わせて適切に表現する社会言語能力、言いたいことを伝えるための対処をする方略的言語能力の4つがある。これらを持つていけば英語が使えると言えらると思う」と説明された。そのために英語を学ぶうえで必要なことを「自分の学習を客観的に見るのが大切だ。本校の英語の授業では訳読式とCLTを組み合わせているが、英語を効果的に学習するためには生徒自身が自分を客観的に見なければならぬ。客観的に見るための基準としてForm・Use・Meaningの3つを意識する必要がある。つまり学んだことの文法的形、その使い方、そして使ったときにどういう意味を持つのか」と挙げられた。最後に生徒に向けて「英語の発音や単語の意味を覚えることも重要だが、実際に使うときにどういうニュアンスかを知っておかないと意味がないので、ぜひ学んでほしい」とメッセージを送られた。

武田先生は英語の授業形式について「The Grammar Translation Method (訳読式)は日本で古くから行われてきた英語の教授法だ。これは教師が日本語で生徒に話したり、質問したりする形式の授業のことだ。一方、最近注目されている方法はCommunicative Language Teaching (CLT)というもので、これは英語でコミュニケーションを行う能力の獲得を重視した方法だ。授業では先生と生徒が双方向に英語を使って話することになる。先生からすると前者の方が楽だと思うが、生徒からは後者の方が良いという意見もある」と明かされた。そしてCLTについて「ある論文でCLTについての4つの問題点が指摘されている。それは文法の軽視、会話能力の過度な重視、会話の内容が制限されてしまい会話の自由度が低いこと、先生の負担の大きさの4つだ」と述べられた。また武田先生はどうすれば